施工者に幸あれ 第83回

天賦の才が畏敬の念に磨かれる 工学者・構造家 竹内 徹

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco

■天を衝く建築

東京工業大学建築学科4年生のとき，構造を志した。シェル構造の授業で，「こんな式，君達には分からないよね」と先生に言われたのがきっかけだ。元来の興味心が頭をもたげ，竹内徹さんは「それが運の尽きで魔法のように軽快で洗練されたストラクチャーの虜になった」と笑う。大学院を卒業する頃は，恩師鈴木敏郎先生としては天才肌の竹内さんに大学に残って欲しかったようで，就職先を紹介してもらえなかったから，新日本製鉄へは自分で就活したとか。建築事業部で設計をしていたときに，社内の留学制度に選ばれた。大学ではなく，Ove Arup & Partners（ロンドン）にしたのは実務を体験したかったから。構造エンジニアのピーター・ライスがディレクターとして率いるグループCで，建築家と密な時間を過ごす。アンビルドもある中，設計料の契約など，日本とは違うことも学ぶ。屈指の構造デザイナーは，カリスマ性をもちヒューマニティのある人柄だったという。構造家が建築家と協働してデザインをきわめていく手法も体得。それにも増してライスの人間性が，竹内さんに大きな影響を与えたようだ。

帰国後に新日本製鉄のエンジニアとして日本長期信用銀行本店のガラスキューブの設計を手伝った。今も記憶に残る傑作だ。竹内さんが目標とした「天を衝く摩天楼」に出会ったのが34歳。鉄骨コントラクターとしてコストコントロールもした。自分が設計したThe Center（香港）の350mに達した構造体を，帰国する航空機から見たときには大いなる畏れを感じたという。

「構造設計のクライアントは人間だけでなく自然でもある」と認識した一瞬だった。

■醍醐味

新日本製鉄を率いる一人だったはずの竹内さんが，母校東京工業大学に戻ったのが2003年。自身にとっても「思いがけなかった」が，先輩の仙田満さんや和田章さんの強い働きかけの成果。大阪生まれで民間企業出身の，商才に長けた学者の誕生でした。

同時期に東工大に戻った安田幸一さんとの協働は国立大学の立場と予算折衝を乗り超えて，東京工業大学緑ヶ丘1号館の耐震改修工事へとつながる。

日本構造デザイン賞を受賞するなど社会的評価を受けて，その後10棟以上の耐震プロジェクトを続ける。附属図書館は意匠の美しさと構造の力強さで今も学生に「チーズケーキ」と愛称で呼ばれ人気。

学生との研究は，実務の役に立つことをモットーにしている。大学内の耐震改修は当然だが，例えば東急電鉄大井町線の緑が丘駅の駅舎も代表作の一つ。一般企業なら時間がかけられない息の長いプロジェクトも研究室ならこなせる。一緒に全力で取組み，学生との信頼関係の中からよい建築を生み出す。学生からはワンダーフォーゲル部の顧問としても頼りにされる。学校に戻ってからの年月から「研究者，教育者としての生き方に醍醐味を感じられるようになった」。

エンジニアとしての抜群の解析力とデザイン力。理論に基づく確かな自信が言葉に出る。卒業させた学生の就職先を完璧に言えるのは単に記憶力ではないだろう。チャーミングな表情やユーモアから感じられるのは愛。

『建築学のすすめ』（昭和堂，2015年）に竹内徹さんが書いた半自伝コラムがある。出会う言葉にも人柄が秘められている。容姿も精神も心の言葉も若く感性に溢れる。

神への挑戦！ムラムラと闘志が湧く！深い満足感！エキサイティングだ！…。

構造界を，引っ張っていく確かな存在。特異な才能をもつ構造のスペシャリスト。